SY3-2

乳歯と永久歯の萌出時期および順序の変化について -30年前との比較-

憲司 有田

大阪歯科大学歯学部 小児歯科学講座

近年、先進国では発達加速現象は停止傾向にあると考えられている。事実、日本人の身長の伸びは 1970年代からペースダウンし2005年前後から止まっている。一方、初潮に関しては、わが国では平 成期に入ってから低年齢化が進行し、今や世界有数の早い性成熟傾向を示していると言われている。

さて、初潮時期同様、乳歯・永久歯の萌出時期などの早期化は成熟前傾現象の一つである。日本小 児歯科学会は、1984年大規模調査を行い、永久歯の中で下顎第一大臼歯(6)が最初に萌出する小児(以 下M型)の割合より下顎中切歯(1)が最初に萌出する小児(以下I型)の割合が上回っていることを認め、 初めて日本人に永久歯萌出順序の逆転現象が生じていることを報告した。このような逆転現象は、す でに欧米では1950年代から報告されており、経済成長における食生活を含めた栄養状態と生活環境 の激変、とくに欧米型の生活様式や食生活習慣の影響が考えられている。

日本小児歯科学会では、30年を経て再び同様の調査を実施し(データ解析中)、いくつかの興味深 い変化を認めている。例えば、1930年代以降1984年を含めて変化が認められなかった最初の乳歯の 萌出時期が男女とも1か月早くなっており成熟前傾現象が認められた。また、永久歯の萌出順序にお いては、前回調査から認められたM型からI型への逆転現象がさらに進行していることを認めた。

このような歯の萌出時期・順序の変化は、口腔の形態・機能の発育に密接に関連するため、離乳食 の開始時期や進め方や歯列・咬合の治療などにおいて重要な情報であり、かつ、う蝕病原菌の定着、 う蝕発生時期・罹患率などに微妙に変化をもたらすため、フッ化物歯面塗布や歯みがき指導等の開始 時期や応用方法の決定等においても重要な情報である。また、産科、小児科など医科分野、基礎科学 分野、教育分野および福祉・行政分野においても重要な情報である。

さらに、乳幼児期の育児不安は、「子どもが正常に発育しているのか」という日常的な健康面につい ての内容が多いと言われているが、歯の萌出時期が臨床的に有意な小児の成熟度の指標となるだけで なく、保護者にとっては初めての歯の萌出は待ち遠しいイベントであり、その遅速は十分に不安の 要因となり得る。最新の歯の萌出時期・順序に関する情報を子育て中の保護者に正しく伝えることは、 育児不安を軽減させ、ひいては小児の健全な育成に役立つものと考える。